

伏見城城下町の桃山茶陶

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

桃山茶陶の流行 安土桃山時代に花開いた桃山文化。その一つに「茶の湯」の隆盛をあげることができるでしょう。焼物にも大きな変化が起こり、茶事・茶会に使用するための陶器＝茶陶が生産されるようになりました。茶陶は陶工のひらめきや茶人の好みを反映した多様な形態・斬新な意匠が特徴で、桃山文化を代表する遺物となっています。洛中では三条通沿いの弁慶石町・中之町・下白山町の「やきもの屋」跡から多量の茶陶が出土しており、いずれも京都市有形文化財に指定されています。

さて、東山丘陵南端に位置する伏見は、文禄元年（1592）の指月屋敷の建設に始まり、豊臣秀吉、徳川政権によって城郭・城下町の建造・整備が進められ、洛中と比肩できるほどの都市となりました。武家屋敷や商工業者の住まいの発掘調査では、各種の茶陶が出土しています。今回は京町南七丁目出土した茶陶を紹介します。

京町南七丁目の調査 調査は京阪電鉄丹波橋駅西側にある京都市呉竹文化センター建設工事にもない実施しました。調査地が西面する京町通は、伏見城城下町を南北に縦貫する主要街路で、西側に平行する両替町通とともに道沿いには商工業者が集住していました。

調査では京町通路面・西側溝の



写真1 絵志野水指 蝸牛の殻の渦巻きが見つかるでしょうか（部分写真）

ほか建物・堀・溝・井戸・土坑などが見つかりました。また、安土桃山時代から江戸時代前期の遺構からは、志野・黄瀬戸・織部・唐津・京焼・中国製磁器などの高級食器や茶陶が出土していることから、有力な商人の住まいの一角であったと推測できます。

絵志野水指 (写真1) 水指は茶釜に注ぎ足したり、茶碗・茶笥を清める水を入れておく器です。広い底部から体部はわずかに内傾して立ち上がり、口縁部は内側に折り返して蓋受けを作る矢筈口になっています。ロクロ成形ののち、体部にはへらで凸帯、3方に縦方



写真2 唐津向付

向のヘラ彫りを施すなど凝った意匠を創出しています。また、外面には草文・蝸牛^{かたつむり}などを大胆に描き、鉄絵の上に厚く長石釉を掛けることから、還元されて鼠色に発色するのが絵志野の特徴です。底部が欠損していますが、伝世品にもほとんど類例がない貴重な作例です。

唐津向付 (写真2) 向付は料理を入れる器で、膳の奥側に置かれることに基づく名称です。小さな削り出し高台から体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は外反させて小さな玉縁を作ります。ロクロ成形で、高台部には重ね焼き痕があります。体部内面には車輪・轆^{ながえ}

と梅の枝を描き、口縁部の三方を3条の線で区画しています。4点を復元しましたが、本来は5客以上の組み物だったのでしょうか。

黄瀬戸盤 (写真3) 口径約27cmの大型品です。底部外面中央を凹型に削り込む碁笥^{ごけぞこ}底で、体部は大きく開き、口縁部は外反して幅のある縁を作ります。ロクロ成形で、底部から体部外面はヘラ削りで仕上げます。内外面には4か所ずつ重ね焼き痕があります。釉薬は白濁気味の黄色で、内面中央には花文を描いて斑点状に緑色の釉薬(胆礬^{たんぱん})で飾りますが、発色はよくありません。



写真3 黄瀬戸盤



写真4 黒楽茶碗

黒楽茶碗 (写真4) 器高がやや低めの半筒茶碗です。貼り付けの輪高台で、底部内面中央には茶溜まりがあります。体部は屈曲して直立し、中ほどを少し引き締め、口縁部は内湾気味に丸くおさめます。手づくね成形で部分的にヘラを使用して仕上げしており、器壁は薄手です。高温のまま窯から取り出す「引出し黒」の技法で漆黒に仕上げられています。

おわりに 伏見城城下町では、この他にも茶陶が出土する遺跡の調査例が増加しています。伏見での茶の湯の流行を示すことに他なりません。さらに出土遺構の検討や洛中と伏見で出土する茶陶を比較することで、地域性や好みを明らかにできるようになるかもしれません。 (山本雅和)